

## 水庭リベンジ

佐藤 透



今年も、川魚(淡水魚)の捕獲にもってこいの季節がやって来た。子供ら3人とも大学や高校(入寮)で出っ払い、作業助手が誰〜れも居なくなって少々難渋はするけれど。からっからの天気が3日も続いたあとの週末は、レプト業務もさておいて、そわそわ絶好のポイントへと赴く。

そういえば山野峡から小田川にかけての自然も、年々生き物が少なくなってきた気がするなあ。でもいったん川に入ってしまうとそんなことはすぐに忘れて、もっぱら獲物を狙ってる。あれはオイカワ、カマツのちびかも、ズナガニゴもいるいる、鮎は鮎っ子はおらんかね、砂底のこれこれこれはカマツカじゃで、やっぱいい、一丁上がりい。



川の水量が減ると、水を求めて底物が案外浅瀬の岩陰に潜んでいるもんだ。ややや、このぬるぬる感は何んじゃらほい。岩間を探った手にただならぬ感触、じわりじわりと両手を差し入れて、手のひらと岩底との空間に奴っこさんを留める。これを取り逃しては夢見が悪いとばかりに、目いっぱい我慢をする。川面に背伸びしてふ〜っとひと息いれて、ふたたび水中での捕獲作業に取り掛かる。これこれあばれるでない、こっちがしっぽじゃな、指先に思わず力が入ってしまって、あっこりやまずい。押しつぶすことなく逃がさずこちらに頭を向かせる。こりやあ、指と指の隙間からこぼれるでない。岩肌と手掌でこさえた空間をそろりそろりと上方向に移動して、そのままかかえてコンビニ袋にいきなり流しこむ。あっこりやギギじゃん、やっぱし。捕獲されるとぎぎっぎ〜と鳴きをいれる、鳴き魚。超大物、大漁じゃ大漁じゃ、ほんに粘り勝ち。捕獲したあと籠といっても半透明の単なる昆虫採集器に移し替えて、ゆうに20cmはあろうか、淡いモスグリーンのつやつやとした肌を空に透かして眺め





ては、しばしの裕福な時間を楽しむ。

去年は、サギ太とご近所のノラ猫そして鯉ヘルペス(KHV)にしてやられた水庭だったけれど、今年はリベンジ、revenge(雪辱)せんといけん。サギ太は悠然と屋根の尾根に陣取って、水庭を監視する。地上はるかの高所からでも、U2 偵察機はたまた軍事衛星にも負けず劣らず、獲物を捕捉するや巡航ミサイルのごとく急降下してやってくる。鮒や真鯉の黒ものはいいいけれど、色ものとくに光りものの錦鯉は目立つらしい。通販で手に入れた、鳥の地磁気をかく乱し、フラッシュ閃光で撃退する防鳥器の優れものや嫌がる超音波を発するねこ

バリアーなど最新の科学機器の数々は、野生のものにはてん〜で歯が立たない。それじゃあサギ太やノラを物理的に寄せ付けない網を池に張り巡らせる以外にありやあせん。鳥と猫がぐぐれない網目サイズで水庭のサイズにぴったりの防鳥網をインターネットで早速オーダーメイドした。



鯉がいなくなって大量発育し、水庭全域を占拠したホテイアオイ草は、昨秋全てを処分し、子供ら総出で水庭池底を大掃除した。それから水を抜いたまま、からからにすること4ヶ月、濾材も更新して3月初旬に新しく水を張った。濾過バイオ(B-4)をたっぷり加えて準備万端、手始めに、餌金100匹とタイクバラタナゴ300匹を入れてみた。またまたビiddersのネットオークション

[\[http://www.bidders.co.jp/koi/index.html\]](http://www.bidders.co.jp/koi/index.html)に

お世話になることになった。当歳の若鯉から3年物まで、つぎつぎと仲間を増やし賑やかな日々が始まった。



何としたことか、4月の半ば、ちょうど水温の上がる時期に、まともや鯉だけが餌を食わなくなり、やがてぼろぼろと毎日死んで浮かんだ。やれやれ、またかいな、やっぱどこかにウイルスが居残ってたんかなあ。水庭掃除の際に薬剤消毒も追加しとけばよかった。鯉ヘルペスも所詮はウイルス感染、HIVやHCV感染例での手術場殺菌と同じく、塩素が効くとのこと。農林水産省のホームページ

[\[http://www.maff.go.jp/koi/\]](http://www.maff.go.jp/koi/)では、次亜塩素酸ナトリウム溶液かサラシ粉(次亜塩素酸カルシウム、プール殺菌剤)を有効塩素濃度200ppmで1時間暴露するのがいいって書いてある。だけど、水を張って大勢のお魚さんがすでに住みつ



しかるに、次の日もまたその次の日も、鯉が水面をぱくぱくと鼻上げで、喘いでいたかと思うと翌日には死んでしまった。こうなると弱いウイルスよりもしぶとい細菌による感染が原因ということ



になるなあ。鯉仲間の情報から、今頃の時分は鯉病(えらびょう)が流行つとるでえって。指摘されて鯉を調べてみたら、ピンク色の鯉のものではなく、死んだ鯉すべてで鯉がただれて茶色から黒褐色に変色していた。これじゃ鼻上げして呼吸困難にもなるわけじゃね。鯉病について調べてみると、その後の新鯉病から新々鯉病、昨今は錦鯉の里新潟あたりでも新々々鯉病なる細菌感染が蔓延しているとのこと。これには抗生物質の投与が必要になる。



貴重な錦鯉であれば、昔はゲンタシンを胸鰭根元に筋注(?)すると治っていた。しかし、今のご時勢、新規の薬剤でないともはや効かないという。水面下では耐性菌の発生が当たらず触らずの問題となっているってわけ。ほんじゃ、期限切れのアミカシンかイセパシンでも使うてみるかね。MRSA、はたまた耐性 MRSA でも出たらどうしょうかな。そういえば土用の丑の日、中国の鰻(うなぎ)養殖場で未認可薬剤が使用されたため輸入禁止となり、今年は鰻が少々品薄だったなあ。養魚場やその他の養殖業界であれ、われわれ医療の世界であっても、抗生物質と耐性菌はいずれも同じく、みなさんお困りのご様子。

いているこの水庭じゃあ、いまさらできません。ならば、じゃの道は蛇、養鯉事業主から、この方面の最新情報を得た。米国では航空機の機内飲料水の消毒に使用が義務づけられている、水成二酸化塩素(プロウジン)

[\[http://www.bio-cide.jp/index.html\]](http://www.bio-cide.jp/index.html)を飼育水に 12ppm 量投与すると、秒単位、分単位の時間で塩素の 7 倍の殺菌力が得られる。超短時間で鯉ヘルペスウイルスが取り除けるとのこと。もちろん魚にもヒにも無害で、即座に使用した。これで鯉ヘルペスは完治できた。

を飼育水に 12ppm 量投与すると、秒単位、分単位の時間で塩素の 7 倍の殺菌力が得られる。超短時間で鯉ヘルペスウイルスが取り除けるとのこと。もちろん魚にもヒにも無害で、即座に使用した。これで鯉ヘルペスは完治できた。

やはり、鯉に限らず、動物、はたまたヒでもそうかもしれないけど、病気の治し方には共通するものがあると思う。今のご時勢、医療と介護がいつのまにやら別立の制度に振り分けられたけれど、医療も介護も行き着くゴールは同じところにあるはず、ですね。病気や細菌・ウイルスの本丸をピンポイントで撃破するよりも、とりあえずはそれらと共生し、やがては打ち負かす体力・免疫力をつける長期的作戦で

総合力を培う方がモアベターじゃない。西洋医学がだめなら東洋医学でやるっきゃない、医者が居なけりゃ長老の知恵を借りるしかないって感じ。病気に強い鯉を育てるには、日々の食餌養生それこそ生活養生が肝心だね。



天然エキス配合の鯉用飼料の商品コピーに[\[http://www.niigata-net.com/\]](http://www.niigata-net.com/)、“野生動物はほとんど病気にかかりません。それは常に酵素やビタミン、ミネラルの宝庫である野草を食べているからです。野草に大量に含まれている有効成分によって体内の免疫力が高められ、自然治癒力がいかに発揮されているからです”とある。ごもつともでありんす。早速に天然高濃度エキスと野草エキス配合フードを取り寄せた。にんにくっぽい臭いが強烈で、元氣も

りもり出そうだけど、お魚さんはすぐには喰いつかない。ヒトにも使える免疫力を高めるというインドネシア原産薬用植物パチエ:ノニ(ヤエヤマアオキ) [\[http://www.kanzai-net.co.jp/\]](http://www.kanzai-net.co.jp/)を手に入れて、これを



を混ぜてみた。試しに賞味するとミロココアっぽい〜いお味となった。配合フードとノニ、さらにお化け野菜ができる地元因島産の万田酵素[\[http://www.manda.co.jp/\]](http://www.manda.co.jp/)を混合し、水で餌粒の硬度を調製した。この特別治療食を与えることが、毎朝の日課となった。

結局のところ、日々の食餌養生で、お魚さんはみんな食欲・免疫力増進が得られて、これで水庭リベンジ。その後の錦鯉飼育は順風満帆で、いろいろな種類、サイズの錦鯉がところ狭しと水庭を周遊する。華やかな花秋翠、シンプルな浅黄、粒々真珠鱗(しんじゅりん)の紅白、きらきら輝く銀鱗空鯉・銀鱗昭和・銀鱗緋写り、もつともっと大きくなる雪舟の白写り、これからお化けお楽しみ葡萄衣(ぶどうごろも)、超レア物の銀鱗丹頂五色三色などなど。おまけに江戸錦、オランダ、らんちゅう、丹頂、出目金、コメットなどたくさんの金魚やタナゴたち、はたまた川えび、ドブ貝もみ〜んなみんな一緒に住んでいる。

今では、水庭の住人は、餌缶の音や手拍子だけでなく、居間の掃除機にもすばやく反応して、いっきに群れ成し淵に迫り来る。水庭に住む鯉たちの持つ本質的な純朴さに癒され、餌やりに邁進する迫りに元気を頂戴する毎日である。(060901 記)